

浦 歌無子

月間の佳作に選ばれた作品のなかから自選十篇を一組とした応募ということで、応募者の皆さんそれぞれにきらりと光る作品があり、何度も読み返し迷いながらの選考となりました。

昨年の奨学生選考のときにも思いましたが、これまで個別に読んでいた作品をまとめて読むことで、新たに詩と出会い直す喜びがあり、個々の作者性をあらためて知ることができました。

受賞された方も残念ながら受賞にいたらなかった方もぜひ書き続けてほしいです。

選者という立場には慣れることがなく、毎月おおいに悩みながら選考し、恐れを抱きながら選評を書いていますが、新鮮なポエジーに触れられることを嬉しく思い、感謝しています。

また、長く投稿してきてくださる方の作品の深化に感嘆したり、作者の違う作品同士が共振していたりと、継続の力、場の力を感じています。

これからも魅力的な作品に出会えることを楽しみにしています。

以下、特に印象に残った作品や作風に関して記します。
新人賞のまちりこさん（埼玉県）の作品は

梅雨時の日差しの白さ／／図書室で二人並んで窓を見ている

古井戸に投げた小石の音を聞く／空蟬ひろい持ち帰る夏
美しい訛りで／夜を見渡せば／色づいていく／おかえりの声

など、風景と心理が豊かに響き合い、読み手の記憶を呼び覚ますような普遍性を有しています。また、目の奥に静かに潜む傘があり／閉じれば涙が溢れてきますの一篇の持つ美しさには強く惹きつけられました。

次に奨励賞の作品に関してですが、まず、翠さん（東京都）の作品。

命がないから／あんなに／からみあうケーブル
ルリタテハ／入道雲をくいとめて

脚の長い蜘蛛だけが／約束通りに来てくれました。

腕時計になる。／／夜の空を飛ぶ。

と、小さな生き物や物体に対する心寄せが印象的です。

それは

炭酸のはじける泡のひとつぶで／これからだったただの
ひとつぶ

という作者の姿勢と関わっているように感じられました。

五味はこさん（神奈川県）の作品は

私家版を撫でて一日を終わらせる

遠い比喩引き寄せ白木蓮が咲く

さらさらとネーブル転げ落ちる坂

左手に異なるひかり宿らせて／並行という永遠をゆく

など、美しいイメージが身近な存在に新たな輝きを与えています。

藤色さん（京都府）の作品には卓越したユーモアのセンスを感じます。

なにが足りなくて烏

約束は遠くでよろしくやっている／稲穂と並び揺れてたりする

雨の日の唐揚げのじゅわ

素麺の素の字に惑わされて私たち

文字そのものへ考えをめぐらせるなど言葉への向き合い方が新鮮でした。